

ある訪問看護師のアタマの中

1

～素直に映画を楽しめないひねくれ者に女神降臨～

山岸 若菜

はじめに

対人援助マガジン執筆の記念すべき第一回目、何を書こうか悩みました。

仕事で出会った事例紹介のようなことをするつもりでしたが、いざ書こうとすると、どうも自分らしくないなと思いました。

さて、自分らしくってどうしたらいいかなと迷っていた時「マジメな顔してるけど、面白いですね。」と人によく言われることを思い出しました。

出会った物や人、出来事に対して、自分が頭の中でこっそりしているツッコミを書いたら面白いかなと考え、そのまま連載のタイトルは『ある訪問看護師のアタマの中』に決めました。

別に訪問看護師でなくても良かったのですが、そこは一応対人援助の仕事してるよアピールです。

今回は家族で映画を観に行った時のことを書こうと思います。

医療従事者の習性

医療の仕事をしていますが、医療系のドラマや映画があまり好きではありません。

なぜならすごくカッコいい。カッコよすぎるからです。

シリアスな展開のドラマほど、描かれる主人公たちは自己犠牲精神の塊で、常に献身的に仕事をし、ありえない奇跡を起こします。

イエス・キリストも顔負けの活躍です。

そういう映像を観ると、自己犠牲をしながら一生懸命人のために尽くす医療従事者はすごいと言われている気がして、すごく居心地が悪くなります。

同業者はたいてい同じことを言います。

医療従事者はなかなか医療系のドラマに没頭できない習性があるようです。

とはいえ、医療系ドラマは現代の水戸黄門です。

無茶苦茶だけど『お約束』があって、ドキドキするけど最後はスカッと終わるので、あまり好きではないと言いながらもついつい観てしまいます。

それなのにどこか「いやいや、そんなアホな」と冷めて観てしまうのが残念ですが。

先日、『TOKYO MER ～走る緊急救命室～』という映画を観てきました。

ドラマが好評で映画になる最近よくあるパターンです。

観たことがない方のために映画の宣伝文句を少し書いておくと、

『重大事故や災害現場に駆け、命を救うために危険な現場に勇猛果敢に飛び込んでいく、救命救急チーム“TOKYO MER”の活躍を描く。』

主演は鈴木亮平さんがつとめておられます。

ドラマから観ていますが、鈴木亮平さん演じる喜多見チーフがまあカッコいいんです。

仕事中は冷静沈着、技術は世界レベル。

その上勇敢で力持ち。

仕事を離れるとユーモアがあり、みんなに優しく男前。

そして何かとすぐ脱いで、鍛えた身体を見せてくれます。

最高です。

そして、喜多見チーフの奥さんも、若いのに心臓移植の権威で世界的に有名、というありえない設定の高輪千晶という心臓外科医です。

彼女も自分を犠牲にしても患者さんや子供を助けようとする職業意識の強い医師で、仲里依紗さんが演じておられます。

ドラマでも映画でも、喜多見チーフは大災害の現場に果敢に乗り込んで、次々と人びとを救います。

途中大きな爆発が起きたり、ガスが充満して酸欠になったり、絶体絶命！もうダメ～！

となっても大丈夫。

勇ましい曲とともに必ず誰かが助けに現われ、そんなアホな！な奇跡が起こり、

「出動した現場で死者は出さない」

という MER に課せられた使命はたいてい達成されます。

今回は奥さんの高輪先生も大活躍でした。

妊娠中にもかかわらず、夫婦共倒れの大ピンチに遭遇し、さすがに弱気になる喜多見チーフを叱咤激励します。

自分も一回心臓が止まり、死にかけながらも立派な赤ちゃんを産み、数日後には車椅子で赤ちゃんに会いに行く不死身ぶりでした。

映画を観て泣く家族にドン引き

映画はドラマより奇跡の起こる回数だいぶ多めやな。

でも、大画面で迫力あるし、元気もらえるわ。と思いながらふと横を見ると、

夫と息子が号泣していました。

えっ！？ちょっと待って。

なぜこれで泣ける？

水戸黄門で泣く人いる？と不思議だったので、映画が終わってから2人になぜ泣いていたのか聞いてみました。

すると「みんな助かってよかったな、の涙やん。MER めちゃかっこええし、高輪先生なんか自分ヤバいののに人の心配するとか、やっぱ医者てすごいなあ。」という答えが返ってきました。

いやいや。そら助かるやん。

毎回助かってるやん。

なんならレギュラーメンバーほとんど一回心臓止まったことある人ばかりやん。

と、私の頭の中は混乱しました。

あんなにスタイル抜群で美男美女揃いの医療スタッフなんて見たことないし、現場で奇跡が起こりまくることはありません。

喜多見チーフたちは一生懸命に仕事をして死者はゼロだったかもしれません。

けれど、心臓が止まっていた時間を考えたら植物状態の人は多数出ているはずですよ。

この後、命は助かったけど植物状態になった本人の家族から「こんなことになるなら命を助けてくれなくてよかった」とか言うてくるヤツが出てきてややこしなるやろな。

なんていう想像もついつい頭によぎってしまいます。

だけど、日常が医療と離れている夫と息子は違いました。

彼らは役者さん達の熱演によって、映画の世界にどっぷり入り込んで楽しめるんだと、自分との違いに驚き、羨ましく感じました。

でもそれと同時に、普段医療と関係なく生活をしている人がこの映画を観ると、心臓が一回止まってもみんなすぐ元気に回復するもんだと素直に思うんじゃないかと不安にもなりました。

さらに医療職ならば人を助けるために献身的に働き、自己犠牲をするもんでしょと思う人が増えるかも。

そう考えるとまた少し、気持ちが重たくなりました。

物語と現実とを線引きして観るのが難しいのです。

現実に引き戻す女優の力技

しかし、そんなモヤモヤした気持ちを吹き飛ばしてくれる人が現れました。

映画で喜多見チーフの奥さん、高輪先生を演じていた仲里依紗さんです。

彼女は自分で YouTube チャンネルを運営しています。

赤い髪にど派手な服を着て「ど～も～。なっかりいさでえ～す！」と配信を始める姿に、黒髪で冷静にオペをする知的な高輪先生はどこにもいません。

時代劇をやっている時も、絢爛豪華な女將軍の扮装のまま、コンビニで買い物をしたりしています。

それでも実力のある方なので、その女將軍の役は高く評価されていました。

ドラマや映画はフィクションで、それはそれ、これはこれ、とはっきり教えてくれました。

映画を観て泣いていた夫と息子も、YouTube を観てからは『高輪先生すごい』から『役者さんてすごい』に変わっていました。

これから TOKYO-MER を観る人は、ぜひ彼女の YouTube チャンネルも同時にチェックしてください。楽しさが倍増するのでおすすめです。

仲里依紗さんのおかげで医療系ドラマの見方が変わりそうです。

物語に入り込んで感動できない自分に『これはフィクションだから好きに観たらいいんだよ』と言ってもらえたような気がします。

これからもひねくれモノはひねくれモノなりに、画面の中で起こる様々な奇跡に「そんなアホな！」と盛大にツッコミながら、気楽に楽しみたいと思います。